

壮絶な戦争体験—正確な歴史を伝えたい（満州引揚）

私は、満鉄社員の子として安東で生まれ、大連、新京（長春）、奉天（瀋陽）で育ち、女学校3年（15才）の夏、敗戦を迎えるまでは、天皇崇拝の忠実な臣民として、ただひたすら走っていた軍国少女でした。

1945年8月9日、それまで中立の立場にいたソ連が突如、日本に宣戦布告、怒涛の勢いで侵攻を開始し、北満の日本人開拓地を占領しました。6日後の8月15日、私たちは天皇の玉音放送で無条件降伏の敗戦を知らされました。

ギリギリのところで一家離散を免れた私たち家族一兄は予科練にいて、父・母・私・弟・妹の5人一はとりあえず、奉天の自宅に戻りましたが、一夜明けて生活は変貌し、死の恐怖にさらされた日々の連続でした。これは後で知らされたことでしたが、満州に派遣されたソ連兵の第一陣は、それまでソ連国内の監獄に就役されていた囚人だったそうです。

野蛮な囚人兵はあたりかまわず、日本人や満州人の家に押し入り、目に余るひどい掠奪・暴行を行いました。ソ連兵の憲兵隊（ゲーペーウー）が到着するまでの2ヶ月は死を覚悟していました。

玄関はもちろん、二重になっている窓にも全部バリケードの板を張りましたが、囚人兵はアツという間にメリメリと剥ぎ取り、入って来て、写真機はもちろん、時計や使い古した石鹸までも持ち去りました。特に腕時計は両腕の肩から手首いっぱいまで何十個も着けて、得意になっていました。

私たちは天井裏に隠れ、床下に潜り、息をひそめてコトリとも音もさせず震えていました。真夜中過ぎると父がおにぎりを作って持って来てくれました。母も私も丸坊主頭になり、兄の洋服を着て、顔に鍋墨を塗り、いざという時に飲みなさいと青酸カリも渡されました。ソ連兵は「マダム・ダワイ」（女は来い）と言って女性を探しまわり、それを拒否して青酸カリを飲み命を絶った上級生はフィギュアスケートの選手で美しく優しい方でした。

それから4ヶ月過ぎる頃になると、治安も落ち着きました。父は鉄道の技術、経営手法などの引き継ぎをするために留用—留まること—することになり、家に護衛兵が配置される頃になると日常生活も安定し、学校も男女共学の“沈陽中学”—瀋陽をもじって—として再開しました。消費組合の店で、始めの頃は画板の紐を首から掛けての授業でしたが、その後帰国するまでに2回ほど移動しましたが、留用者の子女たちの教育は大切にされ、環境もよくなりました。

父たちは満州日本人会を立ち上げ、居留日本人の救出、早期引き揚げに向けて、夜遅くまで、時には泊りがけの会合を続け、1946年5月7日、米軍の輸送船に

抽選で受かった 2,400 人の引き揚げ者の第一陣輸送が始まりました。

1948 年 6 月、父の留用が終わり、初めて日本の土地を踏んだ私は、日本が侵略国として満州事変を起こし、その後の 15 年戦争の中で日本軍の残虐な行為によって悲惨な目にあった人々が実際に存在することを知りました。ぬぐい去ることのできない歴史の事実が、私の平和へのこだわりとなりました。

戦争は人間の心を失わせ狂わせます。戦争体験者が少なくなって事実が風化しつつあることを危惧しております。本当にあったことを正確に知る大切さを訴え、命の重さ、戦争の残酷さ、愚かさ、そして平和の尊さを伝え、考えることにつなげたいと思っています。

(M・U)